

## 『新エロイーズ』における人間と市民：その統一の試みの挫折

江本，待子  
福岡国際大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1440761>

---

出版情報：哲学論文集. 39, pp.63-79, 2003-09-25. 九州大学哲学会  
バージョン：  
権利関係：

## 『新エロイズ』における人間と市民

——その統一の試みの挫折——

江本待子

### 一 人間と市民

『新エロイズ』というルソーの著作は、従来文学的なアプローチから解釈されてきた。十八世紀合理主義のまさに修辭法が用いられているとか、周知のように十八世紀に隆盛し始めた小説やロマン派の抒情詩に多大な影響を及ぼしたといった具合である。しかし、このような文学的アプローチでは、ルソー思想の核心を捉えるものとはならない。ルソー思想の核心とは、「人間と市民」の問題である。文学的アプローチでは、この問題が触れられることはなく、『新エロイズ』における修辭法やその小説としての位置付けに力点が置かれるだけで終わってしまっている。

ルソー思想の核心は「人間と市民」の問題である。故に、この「人間と市民」という観点から、ルソーの思想へのアプローチをしていく必要があると考える。しかし、従来この問題はルソーの矛盾として我々ルソー解釈者の前に立ちはだかつていた。『エミール』と『社会契約論』が同時期に執筆され、一七六二年に両著作が出版されたことに起因する「人間と市民」の

矛盾である。ルソーは人間を作ろうとしたのか、それとも市民を作ろうとしたのか。カッシーラーは、『エミール』の教育計画が「やがて来るべき市民の一員」へと導くものであると解釈し、「人間と市民」という矛盾を「人間と市民の統一」と解釈しようとした。しかし、ルソーの思想が「人間と市民の統一」にあるとするならば、『新エロイーズ』はどう解釈されるのであろうか。『新エロイーズ』は単なる恋愛小説であって、ルソー思想の核心からは除外されるもののだろうか。ルソー思想の核心が「人間と市民」の問題にあるとするならば、『新エロイーズ』もその観点から描かれているはずである。事実ルソーは、『新エロイーズ』の第二の序文で、「僕は方法を変えたのであって、目的を変えたのではない」と言っている<sup>(4)</sup>。では、彼の目的とは何か。『新エロイーズ』はジュリの死で幕を下ろす。ジュリの死はいつたい何を意味しているのか。ジュリの死は、人間にも市民にもなれない者の行き着く先なのである。ジュリは、共同体の一員として生きることとサン・ブルーとの愛に生きることとの間を揺れ動く。そして最終的に彼女は死ぬ。ルソーは『新エロイーズ』で、人間にも市民にもなれないジュリの姿を描くことで、「人間と市民の統一」の不可能性を示そうとしたのだ。これが彼の目的だったのである。

作田氏は、ルソー思想を捉えようとして『新エロイーズ』の解釈を試みている。彼は、『新エロイーズ』に示された「クラランの共同体」を、ルソーの「母への回帰」と捉えた<sup>(5)</sup>。『社会契約論』に示された共同体は「ヘスパルタン・ユートピア」であり、ルソーの「父への回帰」であったが、「父」のように戦うことに疲れ、「空想の国」に退いた」と解釈し、「ヘスパルタン・ユートピア」と「クラランのユートピア」という矛盾する二極は、ルソーの内的なアンビヴァレンスが生み出したものだと考えたのである<sup>(6)</sup>。そこでは、ジュリは、ルソーが回帰しなかった母（ヴァランス夫人）と重ねられているのだが、それではジュリの心の揺れは説明できない。人間にも市民にもなれないジュリの姿は浮き彫りにされない。作田氏は、ルソー自身に対する精神分析的アプローチによってルソー思想を捉えようとしたのだが、ルソーという人物が二極を揺れ動いたと説明するだけに終わってしまった。ルソー思想の核心である「人間と市民」の問題は、このような精神分析的アプローチでは、何も説明されないのである。

本論文では、ルソー思想の核心である「人間と市民」という観点から、『新エロイズ』を解釈していきたい。ジュリの歩みを『エミール』における人間の発達段階と重ね合わせながら市民となるジュリの姿を追う。そして、結婚後のジュリの、人間にも市民にもなれず揺れ動く姿を浮き彫りにすることで、「人間と市民の統一」の不可能性を説明していく。ジュリの死は「人間と市民の統一」の不可能性を意味し、だからこそルソーは、人間への道か市民への道かを選択すべきであるとして『エミール』と『社会契約論』を著したのだということを提示する。

## 二 モラルな秩序における人間

『エミール』と『新エロイズ』との関係について、ルソーは『告白』において次のように言っている。「『エミール』中の大胆なのはすでに『ジュリ』（『新エロイズ』にことごとくある）」(O.C., I, p. 407.)<sup>(7)</sup>。つまり、『エミール』で語っていることと『新エロイズ』で語っていることは同じであり、両著作は重ね合わせる事ができるのだ。

その『エミール』では、人間が成長するプロセスにおいて三つの秩序があることが明示されている。「他の存在との身体的な関係 (rapports physiques) において、他の人間とのモラルな関係 (rapports moraux) において、自分を考察した後、彼に残されていることは、同じ市民達とのシビルな関係 (rapports civils) において自分を考察することだ」(O.C., IV, p. 833.)。「身体的な関係」の中にあつては、他者との人間的な関わりはない。「モラルな関係」とは人間的な関わりであり、男女の恋愛関係を意味する。「シビルな関係」とは結婚をし「国家を構成する者 (membre de l'Etat)」(O.C., IV, p. 823.) となることを意味する。自然人エミールは「この三つの秩序の諸段階を経て」「社会の中で生きる自然人 (l'homme naturel vivant dans l'état de société)」(O.C., IV, p. 483.) となる。

『新エロイズ』はジュリとサンブルーの恋愛関係から始まる。サンブルーは言う。「もしあなたという方 (ジュリ) が

いらつしやらなかつたのなら、私は決してこのように、魂の奥では高貴でありながらも境遇においては卑しいという対比に堪え難い思いをすることはなかつたでしょう。この世でいかなる地位を占めたかに眼をとめることなく、安らかに生き、満足して死んでいったでしょうに。だが、あなたにお会いしたのにあなたが我がものにできず、あなたを崇めておりながら一介の男にすぎないとは！(O.C., II, pp. 89-90) 彼はジュリと出会うまでは「何者でもない」(O.C., II, p. 191)、「社会化されていない自然人だったのだ。しかし、ジュリと出会い、彼女の心とその身体を「我がものに」したいと望むことで、彼は愛する心の持ち主としての人間という意識に目覚める。

一方、ジュリもサン＝ブルーとの恋愛において人間に目覚める。「ああ、お二人(父母)の眼の前ではいつも無垢で、慎ましい生活を送っていた時代、お二人の胸にすがらなければ幸福でなく、一步でも離れば心楽しまなかつた時代、あの幸福な時代はどうなったのでしょうか。今では罪深く、おどおどして、お二人のことを思う時身体がおののき、自分のことを思うと顔が赤くなります」(O.C., II, p. 114)。何者でもない子どもの時代を過ぎ、サン＝ブルーとの恋愛によって、女としての自分を自覚する。

『エミール』では「モラルな関係」が始まる時期を「第二の誕生」と呼んでいる。ジュリとサン＝ブルーとの恋愛関係はこの「第二の誕生」に比することができる。「第二の誕生」において、「私たちは、いわば、二回この世に生まれる(Nous naissons, pour ainsi dire, en deux fois)。一回目は存在するために(pour exister)、『二回目は生きるために(pour vivre)』。はじめは人間に生まれ、次には男性か女性に生まれる」(O.C., IV, p. 489)。「これがわたしの言う第二の誕生(1a seconde naissance)である。ここで人間は本当に人間に生まれてきて、人間的なものも彼にとって無縁のものでなくなる。これまでの私たちの心遣いは子どもの遊びごとにすぎなかつた。ここではじめて、それは本当に重要な意味を持つこととなる」(O.C., IV, p. 490)。「身体的な存在(être physique)としての自分だけしかみとめられない間は、事物との関連において自分を研究しなければならない。モラルな存在(être moral)として自分が感じられるようになったら、人間との関連におい

て自分を研究しなければならぬ」(O.C., IV, p. 493.)。「身体的な存在」であった頃は、彼らの「感受性は自分のことだけに限られて」いて、彼らの「行動にはモラルなものはない」(O.C., IV, p. 501.)。「モラルな存在」となった彼らは「他の存在を眺め」、「周りにいる人々に興味を持ち始め、人間は一人で生きるようには作られていないことを感じ始める」(O.C., IV, p. 502.)。ジュリもサン＝ブルーも「第二の誕生」によって、社会の中で生きる人間となるのだ。そして、それは同時に「伴侶を必要とする (l'homme a besoin d'une compagne)」(O.C., IV, p. 493.) 存在へとなることを意味する。つまり、「モラルな秩序」の次に来る「シビルな秩序」の中へと移行することを意味するのだ。

### 三 シビルな秩序へ

ルソーは、エミールが「恋愛の時期」から「結婚の時期」へと移行するにあたって、次のように言う。「夫となり父となることを願っているあなた (エミール) は、その義務を十分に考えてみたことがあるのか。一家の主人となることによって、あなたは国家を構成する者になろうとしてゐる (En devenant chef de famille, vous allez devenir membre de l'État) だが、国家を構成する者であるとはどういうことか。あなたにそれが分かっているのか。あなたは人間としての義務を研究してきた。しかし、市民としての義務というものを、あなたは知っているのか。政府、法律、祖国とはどういうものか分かっていないのか。どんな代償を払って生きていくことを許されるのか、また、誰のために死ななければならないのか、それが分かっているのか。あなたは何もかも学んだつもりでいるが、実はまだ何も分かっているのではないのだ。シビルな秩序の内にひとつの場所を選ぶ前に (Avant de prendre une place dans l'ordre civil) その場所を知ること、そこでどんな位置があなたにふさわしいかよく知ることを学ぶがよい」(O.C., IV, p. 823, p. 1679.)。結婚するということは市民の義務を果たす存在になるということだ。「モラルな秩序」から「シビルな秩序」への移行は、結婚という契機によって市民の義務を果たす存在とな

ることを意味するのである。よって、ジュリはヴォルマールとの結婚によって国家の構成員、すなわち市民となるのである。国家の構成員となる行為は社会契約である。ルソーは「社会契約があらゆるシビルな社会の基礎になっている (Le contrat social est la base de toute société civile)」(O.C., IV, p. 839.) と言ひ、「ヒミール」においてその契約内容を次のようにまとめている。「私達はみんな共同に、自分の財産、人格、生命、そして自分の力のいっさいを、一般意志の最高指揮 (la suprême direction de la volonté générale) にゆだねる、そして、みんなで一緒に、全体の分割できない一部として各人の一部を受け取る」(O.C., IV, p. 840.)。「一般意志」とは「法」であつて、「一般意志の他にはなにもも臣民に義務を負わせぬ」ことはない (rien n'oblige les sujets que la volonté générale)」(O.C., IV, p. 842.)。国家の構成員は「社会契約によつて、一般意志の法の下で市民としての義務を果たすのである。『ヒミール』と対応して『新エロイーズ』でも結婚が市民となる契機となる。ジュリは結婚によつて市民となることを「変革 (révolution)」(O.C., II, p. 353.) と呼び、その日を「私を私自身から永久に取り上げることになつた日」(O.C., II, p. 353.) と呼んでゐる。「貞節でありたい、なぜならそれが家庭を結び、全ての社会を結ぶ第一の義務だから (Je veux être fidèle, que c'est le premier devoir qui lie la famille et toute la société)」(O.C., II, p. 537.) と彼女は言う。「私を私自身から取り上げる」ことによつて社会に対する義務を負うことを誓約するのだ。ジュリは「モラルな秩序」における恋愛の状態から、「シビルな秩序」の中で市民の義務を果たす存在へと全面的に、根底的に「変革」を遂げる。その意味で結婚の誓約は市民となる契約と必ずしも異質ではない。そして、その結婚の誓約に「全人類の暗黙の契約」が加わり、「結婚の公の (publique) 神聖な誓約なくしては、人間的な事柄の合法的な秩序の中 (dans l'ordre légitime des choses humaines) に何一し存続しつゝるものはない」(O.C., II, p. 360) とされ、夫婦や家庭には私的なもの入り込む余地がなくなる。家庭生活はもっぱらあらゆる人間に共通の利益のために営まれる。すなわち、家庭生活はひたすら公共の利益のために捧げられなければならないのだ。「結婚は専ら夫婦が自分達のことを考えあうために行われるものではなく、協力して市民の義務を果たし (pour remplir conjointement les devoirs de la vie civile)」、慎重に

家を治め、子供達を立派に育てるため」(O.C. II, p. 372.)に行われるものである。

さて、ジュリはヴォルマールと結婚して市民となるのだが、その市民生活はヴォルマールが作り出した秩序であるクラランの共同体の中で行われる。その秩序は完全な人為的秩序である。市民となったジュリはその秩序の中で市民として生きる努力をするが、しかし彼女の心はサン・ブルーへと揺れ動く。ヴォルマールによって作り出された完全な人為的秩序の中で、彼女は完全な市民として生きることができないのだ。まずは、ヴォルマールによって作り出された完全な人為的秩序とはどのようなものなのか、以下の章で見ていくこととする。

#### 四 夫ヴォルマルの世界

夫ヴォルマールについてジュリは次のように語る。「彼が家の中に立てた秩序はあの人の魂の底を支配している秩序の反映で、それはまた、世界の統治の中に立てられている秩序を小さい家庭の中において真似ているかのよう思われます。……ここにはいつも主人の手が認められますが、決してその手の存在が意識させられることはありません。彼は最初の手はずを大変よく整えましたので、今では全てが自ずから動いており、人々は規律と自由との利益を同時にうけております」(O.C. II, p. 371.)。ここで言う「世界の統治の中に立てられている秩序」とは神の秩序を意味するが、ヴォルマールは無神論者として描かれる。彼は、「人間は彼自身によってこのようにあるのではなく、人間を超えた何ものかがここで支配している」ということを知らない。しかしヴォルマールは、神のごとき存在としてクラランの共同体に秩序を与える。それは、神の秩序に従ってではなく、「唯一の積極的原動力が秩序への生来の愛」である彼の意志と「判断において滅多に誤ることのない」彼の理性に従って秩序を与えるのである。クラランの庭が「外部の眺め」を隠すことで「自然の魅力のすべてがここに封じ込まれている」かのように思わせ、荒々しい自然を注意深く排除しているように、また「世界のワイン」がクラランでのみ採れた葡

萄によって作られたワインであり、成分の分からない「有名なワインの悪いところ」を排除しているように、あるいはまた、使用人の中でヴォルマールの「規律を満足して受け入れない」者が「信用の置けないし」とみなされ「さっそく縁を切り」クラランから排除されるように、<sup>(11)</sup>クラランにあるものだけが現実性、正当性をもつという約束によってクラランの共同体を成り立たせているのである。故に、このクラランの共同体は、人々がそこで「自由と規律との利益を同時に受ける」ことのできる、しかも完全な人為による国家と考えることができる。

実際、クラランの共同体は、規律を守るための方法が巧みに取られている。主人は一家の父として、召し使いたちの身上の問題にまで立ち入り、愛情を注いでやることで、彼らの行為だけではなく、「意志に対しても権利を得ている」(O.C., II, p. 527.)。主人の目の届かない時間があつてはならないので、「男女間にいかがわしい関係が生ずるのを防ぐために……(男女とも)絶えず忙殺」(O.C., II, p. 98.)しておかなければならない。また主人の目の届かない場所もあつてはならない。日曜日の悪所通いを止めるために競技会が催される。「あらゆる快楽を主人から恵まれている」召し使いたちは、彼らに課せられたさまざまな規律が「快楽もしくは利益の仮面の下に隠されて」いるために、「自分たちが強制されている全てのことを自ら欲して行っているかのように」<sup>(12)</sup>行為する。サン＝ブルは、「秩序と規律だけが快楽を幸福に変えることができる」と言い、このクラランの共同体を「自分の父の家」(父とはヴォルマールを指す)と呼ぶと同時に、「秩序と平和と無垢の支配する素朴で規律正しい家」、「秩序正しい家」<sup>(13)</sup>と呼ぶのである。

家を国家と呼ぶことに抵抗があるかもしれない。しかし、クラランに限らず、ヴァレーの山村の家庭についても国家に比されている。それはサン＝ブルの次の言葉で語られる。「思慮分別のできる年頃の子供たちは父親たちと平等であり、召し使いたちは主人たちと同じテーブルにつきます。家庭も共和国も同様の自由さに支配されていますが、家庭は国家の象徴なのです (la même liberté règne dans les maisons et dans la république, et la famille est l'image de l'État)」(O.C., II, p. 81.)。クラランの共同体は、ヴォルマールによる人為的国家秩序なのである。

そして、その構成員は国家あるいは祖国に対して市民としての義務を担うものとして存在しなければならない。エドワード卿を相手に決闘を構えようとしているサン＝ブルーを、ジュリは次のように諭す。「市民には祖国に命を捧げる義務があり、法律の許可なくして自分の命を自由にする権利はなく、ましてや法律の禁を犯して決闘をするなどもつてのほかだということをお忘れになったのですか」(O.C., II, p.156.)。そして、「こうした市民の義務を果たすことが「徳の作法に従う」ことであるとジュリは付け加えている。ここにおいて徳は、市民の徳として、個人を法に従わせ、国家に奉仕させる根拠として機能している。さらにまた、サン＝ブルーの後見人となった後のエドワード卿も、この世に絶望したので一緒に死んでくれというサン＝ブルーを、祖国のためにしか血を流してはならないといつて戒める。「君は行政官や一家の父としての義務のことを言つて、自分にはそうした義務はないのだから、一切から解放されていると思つている。では、君は生存、才能、知識についてお陰をこうむつている社会や、君が属している祖国や、君を必要としている不幸な人々に対して、なんの義務もないというのか。…君が数え上げているもろもろの義務のうちで、君が忘れてるのは、人間としての義務、市民としての義務だけなのだ (parmi les devoirs que tu comptes, tu n'oublies que ceux d'homme et de Citoyen)」(O.C., II, p.391.)。このエドワード卿もまた、ジュリ同様、祖国のためにのみ血を流すこと、祖国に奉仕することが、国家に生きる人間(祖国を持つ人間)、市民の義務と捉えているのである。クラランの共同体、それはヴォルマルルによる完全な人としての国家であり、その国家の構成員は、市民の義務を担うものとして生きなければならない。

## 五 ジュリの死

完全な人としての国家の中でジュリは市民として生きるのだが、『新エロイーズ』はジュリの死という結末で終わる。しかし、ジュリの死は『新エロイーズ』の構想においてすでにあった。一七五七年十月一日にドウドット夫人から『新エロイーズ』

の写しを求められたルソーは、完成した後で写しを作ると返事をし、同年十一月二十二日か二十三日の同夫人宛の手紙に、版元と『新エロイーズ』の挿絵について相談したことが述べられている。そこで「私は著作に付ける八つの版画の配置を整えた」(O.C., II, p. XLIII.)とルソーは言っている。それぞれの部は二つの版画を挿絵として入れなければならないので、『新エロイーズ』は第四部で終わる構想だったことが分かる。ルソーは第四部の舟遊びの最中にジュリとサンブルーが恋人同士で死ぬ構想を立てていたのだ。<sup>(14)</sup> 完全な人為的国家の中でジュリは生きることができない。実際『新エロイーズ』の中で、恋人同士として死を夢見るサンブルーによって何度となくジュリの死は暗示されている。そしてジュリの死という結末。ジュリは『告白』において題されているように「死にゆくエロイーズ」(O.C., I, p. 407.)として初めから構想されていたのだ。

そもそもジュリの結婚の誓約は「神の御声を聞く」ことによってなされた。「聖書の言葉の中にあれほど烈しく述べられている結婚の純潔、尊敬、神聖、人類の幸福と秩序と平和と永続にとってまことに大切な、清く崇高な義務、単に義務として果たすだけでも実に楽しい義務、そういうものの全てから私は深い感銘を受けまして、私は内面に突然の変革を感じたような気がしました。未知の力が突然私の感情の無秩序を改め、義務の掟と人間本性の掟に従って感情を立て直してくれたように思われました」(O.C., II, p. 353.)。「私はあなた(神)の欲し給う、あなたのみがその源であり給う善を欲します」(O.C., II, 357.)。「私はあなた(神)の定め給うた自然の秩序と、私があなたからお受けしております理性の掟とに關係のある一切を欲します」(O.C., II, p. 357.)。ジュリの結婚には自然性が残っていたのだ。「エミール」において「シビルな秩序にあって(dans l'ordre civil) 自然の感情と優位性を持ち続けようとする人は、何を望んでいいかわからない。たえず矛盾した気持ちを抱いていて、いつも自分の好みと義務の間を動揺して、決して人間にも市民にもなれない」(il ne sera jamais ni homme ni citoyen)。自分にとっても他の人にとっても役に立つ人間になれない」(O.C., II, pp. 249-250.)と言っているルソーの言葉を思い出す。

結婚後のジュリは、「沈黙を雄弁にし、伏せた目に物言わせ、大胆な臆病さを与え、恐れによって欲望を表し、心があえて口に出せないようなことを全て語る…なにやら分らないもの」(O.C., II, p. 341.) を封じ込める努力をする。市民として生きることを選択したジュリであったが、内心の人間としての自然の感情は消え去ってはいない。「彼(ヴォルマール)が幾たびか自らあなた(サン＝ブルー)のことを大きな尊敬の気持ちで私に語られました。…私はこうした話の間、彼が私を観察していることに時折り気づいたような気がしましたが、この気づいたような気がしたということは、不安でならない良心の密かな呵責にすぎないようです。ともかくいずれにしても、私はその点について自分の義務を果たしました。恐れも、羞恥心も私に不正な隠し立てをする気持ちを起こさせませんでした」(O.C., II, p. 371.)。ヴォルマールによる完全な人為的國家の中で、彼女は懸命にその義務を果たそうとする。結婚後間もないジュリに、サン＝ブルーは「あなたは幸せですか」(O.C., II, p. 367.)と問う。これに対しジュリは、「あらゆる点で幸せです」と手紙の冒頭で答えているものの、その理由を挙げの中で、「彼(ヴォルマール)が妻の幸福を願ってくださるということはすでに幸福を手に入れたということではありませんか」(O.C., II, p. 469.)とどう言い回しや、その手紙が涙で濡れていることからして、「立ち騒ぐ波のようにいつも揺れ動いている心」(O.C., II, p. 499.)を完全に黙らせることができない。別の個所では、ジュリは夫や子どもに囲まれながらも、「もっと激しい愛情を、もっと私の愛情に似ている愛情を求めている」(O.C., II, p. 399.)と、従姉妹のクレールに訴えている。彼女が求めているものは、サン＝ブルーとの愛であり、彼女はクラランの市民であることと、人間として生きることとの間で揺れ動く。自然性を残しているジュリにとって、「うわべを取り繕う」ために「國家が市民に要求し得るすべてのことを法律によって規定された宗儀に従って行っている」(O.C., II, pp. 592-593.)夫ヴォルマールとの結婚生活は決して幸せとはいえない。彼女は「先立って死ぬ」(O.C., II, p. 592.)ことを求め始める。

ヴォルマールは、クラランの共同体を完全な人々によって秩序付けたのだが、結婚後しばらくしてジュリの内部にまだ自然が残っていることに気づく。「ただ一つ、まだ克服しなければならぬ不安がいくらか彼女に残っているのではないかと私

が懸念するのは、完全に立ち直っているならばどう振る舞うだろうと彼女がしきりに心の中を探っていることで、しかも実に厳密にそのように振る舞うので、もし本当に立ち直っているならばそんなに上手くは振る舞うまいと思われるのです」(O.C., II, p. 509.)。ヴォルマールの「ほとんど判断を誤ることのない」理性は、ジュリがヴォルマールから与えられた母であり妻であるという役割を懸命に演じていることを見ぬいてはいる。だがヴォルマールは、人間の心の力の力を知らない。「立ち騒ぐ波のようにいつも揺れ動いている心」を知らない。「幸せですか」というサン・ブルーの問いかけがジュリの心に染み入り、ジュリの心の中にある人間としての自然を目覚めさせてしまったことをヴォルマールは知らない。この自然の感情が時間に耐え得るものであることも知らない。だからこそ、「サン・ブルーが愛しているのは過去のジュリである」はずだから、「彼から記憶を取ってしまえば、もう恋心を抱かなくなるでしょう」(O.C., II, p. 509.)と、この理性的な夫は信じているのである。これに対し、「あの比類なき女性(ジュリ)の心は母である時も、妻である時も友である時も、娘である時と同じなのです。そして私の心にとっては永遠の苦しみなのですが、恋人であった時と同じなのです」(O.C., II, p. 486.)と言うサン・ブルーの言葉からは、時間に耐え得る心の存在が明らかとなる。サン・ブルーにとって、人間であることが現実であり、正当である。しかし、妻であり母であるジュリにとって、自らの心の声に耳を傾け、人間としての自然に従うことは、市民の義務に背くことに他ならない。人間でありかつ市民であることの不可能性の中でジュリの心は揺れ動く。その心の揺れを理性的な夫ヴォルマールは知ることはない。

ジュリにとって死への旅立ちとなるシヨン城行きの遠足を前にして、ジュリはサン・ブルー宛てに手紙を出し、クラランという国家の中にあつて満たされない心をもってなおこの世を生きることの悲しみを、彼女は訴える。国家の中で、人間の自然としての心を抱えたままで生きることが不可能となった今、ジュリは死ぬ。ジュリのサン・ブルー宛の最後の手紙は、それまで「ヴォルマール夫人より」という差出人名であったものが、再び「ジュリより」となっている。一市民としてではなく、ジュリという一人の人間として手紙を書く。その手紙の最後で彼女は言う。「私はあなた(サン・ブルー)とお別れす

るではありません。あなたをお待ちしに行くのです。徳は地上でこそ私達を隔てましたけど、永遠の住家では私達を結び合わせてくれるでしょう」(O.C., II, p. 686)。クラランの共同体という現実の中では、彼女は人間として生きることができない。彼女の死は、「シビルな秩序」の中で「自然の感情と優位性」との矛盾に引き裂かれ、人間にも市民にもなれない者の行き着く先として示されるのである。

## 六 人間か市民の選択

物語の最後は、クレールがサン＝ブルーに宛てた手紙で締めくくられる。「彼女(ジュリ)が愛していた人をすべて集めましょう。彼女の精神が私たちを鼓舞し、彼女の心が私たちすべての心結びつけてくれますように。いつも彼女の目の前で暮らしましょう」(O.C., II, p. 744)。この言葉は、クレールが、一見共同体の制度を維持しているかのように聞こえる。しかし、次のように続く。「信頼も、友情も、徳も、快楽も、陽気な戯れも、大地がすべてを呑み込んでしまいました…私は引かれてゆくものを感じます…私の足下で彼女が胸を高鳴らせ、震えているのを感じるような気がします…嘆きの声がつぶやくのが聞こえます…おお、クレール、私のクレール、どこにいるの、あなたの親友から離れて何をしているの、と…彼女の棺は彼女を全部はおさめています…棺は残りの餌食を求めています…待つのももう長くはありません」(O.C., II, p. 745)。こうしてジュリの呼びかけに答えるクレールの声によって、市民か人間かで揺れ動く心の行き着く先は死であることが暗示される。国家において人間として生きることが不可能であるどころか、そこには死しかない。「棺は残りの餌食を求めて」いるとは、更なる死者を予感させる。そうして、国家という共同体は崩壊するのであろう。

『エミール』において、エミールもソフィとの結婚によってシビルな秩序に入っていくが、彼は人間の状態に留まる。「自然と秩序の永遠の掟が存在する (les lois éternelles de la nature et de l'ordre existent)」。賢い者にとってはそれが書かれ

た法に代わるものとなる。それは、良心と理性とによって心の底に記されている。：卑しい人間はジュネーヴにいても奴隷であり、パリにいても自由である」(p.857-858.)。だからといって市民の義務を果たさなくてよいということではない。「祖国を持たない者にも、とにかく、国はあるのだから」(p.858.)。「執政体または国家が祖国への奉仕を君(エミール)に要請しているのなら、…市民の名誉ある務めを果たすがいい (Si le Prince ou l'État t'appelle au service de la patrie, quitte tout pour aller remplir dans le poste qu'on t'assigne l'honorable fonction de Citoyen.)」(p.860.)。エミールは臣民として市民の義務を果たすのだ。また、エミールとソフィとの結婚は、自然の秩序に従って人間として育てられた者同士の間であるため、そこに矛盾や葛藤はない。

一方、「新エロイーズ」におけるジュリとヴォルマールの結婚は、自然と人為の結婚であり、人間と市民との対立の構造がそこにはある。「社会契約論」においてルソーは次のように言っている。「社会の秩序 (l'ordre social) は全て他の権利の基礎となる神聖な権利である。しかしながら、この権利は自然から由来するのではない (ce droit ne vient point de la nature.)。だから、それは約束に基づくものである」(O.C., III, p.352.)。「人間の構造は自然の作ったものであり、国家の構造は人間の作ったものである (La constitution de l'homme est l'ouvrage de la nature, celle de l'État est l'ouvrage de l'art.)」(O.C., III, p.424.)。「社会契約論」で示される国家は、ヴォルマールによる完全な人為の秩序と同じである。「エミール」においてはルソーは「教育が対立している場合には、人間をその人の為には育てないで、ほかの人間の為には育てようとする場合には、どうなるか。その場合には一致は不可能になる。自然か社会制度と戦わなければならないか、人間をつくるか、市民をつくるか、どちらかに決めなければならない。同時にこの両者をつくることはできないからだ」(O.C., IV, p.248.)と言っている。人間と市民は全く異なった存在なのだ。「自然的人間は自分がすべてである。彼は単位となる数であり、絶対的な整数であって、自分に対して、あるいは自分と同等のものに対して関係を持つだけである。市民は分母によって価値が決まる分子に過ぎない。その価値は国家という全体との関連において決まる。立派な社会制度とは、人間をこの上なく脱自然化し、

その絶対的存在を奪い去って、相対的な存在を与え、「自我」を共通の統一体の中に移すような制度である。そこでは、個人の一人一人は自分を一個の人間とは考えず、その統一体の一部分と考え、何事も全体においてしか考えない。ローマの市民は、カイウスでもルキウスでもなかった。一個のローマ人だった。しかも彼らはひたすら祖国を愛して自分をかえりみなかった」(O.C., IV, p. 249.)。そして、国家の中で人間として生きる者は、ジュリのように死ぬしかない。

一七六一年、『エミール』と『社会契約論』の完成(一七六二年両著作出版)。この完成に先駆けて、『新エロイズ』が一七五六年から執筆され、一七六一年出版となる。『新エロイズ』は、人間であると同時に市民であることの不可能性を描いた。では、死なないためにはどうすればよいのか。人間として生きるか、市民として生きるかを選択するしかない。その二つの選択を、ルソーは『エミール』と『社会契約論』で示したのだ。『エミール』と『社会契約論』は、「なんら矛盾するところのない一貫した体系をなすもの」(O.C., I, p. 334.)とルソーは『告白』において言っている。その一貫性とは、『エミール』と『社会契約論』において、人間か市民かの選択の提示に他ならない。ジュリのように人間か市民かの矛盾に引き裂かれ、共同体が崩壊することを防ぐ手段は、人間として生きるか、市民として生きるかを選択するしかないのだ。

ジュリはサン＝ブルーとの恋愛によって「モラルな秩序」に生きる人間となる。しかし、その一方で、ヴォルマールとの結婚で「シビルな秩序」に生きる市民となる。そして彼女は人間にもなれず市民にもなれず死んでいく。これが『新エロイズ』の構想であった。そして同時期に、死に終わらない『エミール』と『社会契約論』の構想もしていた。ルソー思想の核心である「人間と市民」の問題は、人間にも市民にもなれない者の死から、人間か市民の選択へと我々を導くのである。

註

(一) Santo L. Aricò, ROUSSEAU'S ART OF PERSUASION IN "LA NOUVELLE HÉLOÏSE", 1984.

- (2) 江本 待子『ルソーにおける秩序への志向』(第7号『デアロゴス』哲学倫理研究会15頁)及び、江本 待子『「エミール」考察』(第32輯『哲学論文集』九州大学哲学会、17頁)において人間と市民の問題を考察しているので参照してもらいたい。
- (3) 四・カッシーラー 生松 敏三訳『ジャン・ジャック・ルソー問題』みすず書房1997年 95頁。
- (4) O.C.: II, p. 17. 「自分の言いたいと思う事を有効にするには、それを必ず利用する人々に耳を傾けさせることが先ず必要なのだ」とルソーは言う。同時期に『エミール』と『社会契約論』も書き上げたルソーにとって、彼の言いたいと思う事が「人間と市民」の問題であつたと本論では捉える。
- (5) 作田 啓一『増補 ルソー 市民と個人』筑摩叢書 1992年
- (6) 同書第二章「ルソーのユートピア」の中で「戦闘的ヒロイズムと恋愛への陶醉とがルソーの意識の中では両極として位置付けられている」(71頁)と述べている。
- (7) 『新エロイズ』には、ルソー思想が百科全書的に投入されている。それで、それは、「ルソー大全」とも「ルソー思想の概説書」ともいわれる」(飯岡 秀夫『ルソーの「文明論」―「再生」の行方―』高文堂出版社2002年、96頁)。故に、『新エロイズ』の内部に人間と市民の問題を読み取ることができるであろう。『新エロイズ』ではジュリの内に人間と市民を統一させようとする試みがなされるのだ。しかし統一できず(ジュリの死)、人間と市民を鮮明に分ける『エミール』と『社会契約論』とへ導かれるのである。
- (8) O.C.: II, p. 155(d) Br.
- (9) Ibid., p. 701. また次の部分も参照。「ああ、私達には生きており、これほど発刺としている自然の光景が、不幸なヴォルマールの目には死んでいるのでして、万事がまことに甘美な声で神のことを語っているこの諸々の存在の大きな調和の中にいて、あの人々はただ永遠の沈黙しか認めないのです」(ibid., p. 592.)。
- (10) Ibid., pp. 490-491.
- (11) Ibid., pp. 483, 552-553, 455.
- (12) Ibid., pp. 194, 101-102.
- (13) Ibid., pp. 462, 466.

- (14) Ibid. pp. XLIII-XLV. を参照。実際完成した『新エロイーズ』の第四部の舟遊びでもサン＝ブルーはジュリと二人で死ぬことを夢見る (ibid. p. 519)。(ここ)に過去の構想(舟遊びの最中に恋人同士として死ぬという構想)が反映されていることが分かる。また、『告白』において、1757年春の到来とともに「私は『ジュリ』の終わりの各部のための手紙をたくさん綴った。…記憶に誤りがなければそれらは第四部の終わりにある」(O.C. I, p. 438.)とルソーが述べている点も、『新エロイーズ』の最初の構想が第四部で終わるものであったことを裏付ける。

O. C. = Œuvres complètes de J.-J. Rousseau, Bibliothèque de la Pléiade.

邦訳は岩波文庫参照。

(平成十三年本学大学院博士課程単位取得満期退学・福岡国際大学非常勤講師)